

MEMO



特別協力

○垣澤社中の皆様

舞台介添 信太龍也様、森隆史様

動画撮影 阿部博一様

物販 川崎直樹様



広報協力

砧区民会館（成城ホール）、産経新聞、成城自治会、成城大学、

東京新聞、東京都庁

撮影協力

田川進様、千島和男様

協力

○成城大学民俗学研究所

松崎憲三先生、林洋平様

主催

2017 江戸里神楽学生実行委員会

○学生スタッフ

馬場綾音（実行委員長）、鈴木彩子（副実行委員長）、

川名瑞希、玉井里奈、宮崎優香



『里神楽ワークショップ in 成城大学～生きている神楽～』

構成・文責 玉井里奈 鈴木彩子

制作発行 2017 江戸里神楽学生実行委員会

発行年月日 2018年3月21日

印 刷 成城大学民俗学研究所

江戸里神楽公演学生実行委員会 主催
成城大学民俗学研究所 協力

里神楽ワークシヨツプ in 成城大学
「生きている神楽」

平成三十年三月二十一日（水・祝）

開演 十三時

主催者挨拶

第1部 講義「神楽の歴史と変化」 13:00～13:30

講師 傑木悟先生（成城大学文化史学科 准教授）

第2部 実演&ワーク「神楽の現在と未来」 13:40～14:40

演者 垣澤瑞貴さん（相模里神楽 垣澤社中）

第3部 出演者座談会 14:50～15:30

傑木悟先生 垣澤瑞貴さん 田村明子さん（成城大学民俗学研究所研究員）



さがみさとかぐら

相模里神楽垣澤社中

神奈川県厚木市酒井を拠点として里神楽や面芝居、祭囃子、獅子舞を伝承している。伝承する相模里神楽は厚木市指定無形民俗文化財である(昭和46年指定)。

神楽師・本間平太夫(綾瀬市)の弟子であった垣澤鹿造氏が明治45年に垣澤社中を興した。愛甲神楽を継承する萩原家(厚木市)と姻戚関係となり、萩原家が廃家したのちは垣澤家がその神楽面を受け継いだ。現在は瑞貴氏の父である勉氏が三代目の家元を務め、厚木市内の神社祭礼・教育委員会主催の保存公演などへの参加のほか、里神楽に親しむための活動を精力的に行っている。



(写真 垣澤瑞貴氏提供 神奈川県立青少年センター公演時に撮影)



里神楽

広義には宮中の御神楽以外の民間の神楽をいい、狭義には一般に江戸の里神楽をさす。垣澤社中が伝承するのは、『古事記』や『日本書紀』などの神話を題材とした「神代神楽」で、面をつけて行う黙劇である。神代神楽の発祥は定かではないが、近世初頭に興り、十七世紀後半から諸国に広まったと考えられている。神奈川県ではもっぱら「神代神楽」と呼ばれるが、他県では岩戸神楽、伯耆神楽、太々神楽、十二座神楽、廿五座神楽などと呼称されている。江戸を中心とした里神楽では、神楽師と呼ばれる専門の神楽社中が、神社側の要請に応じる形で祭礼の際に神楽を演じている。

神代神楽が黙劇様式化したのは、寛政2(1790)年に江戸で演じられた京都壬生寺の壬生狂言(中世に発生した仮面黙劇で、演目は能や物語などから取材)の影響を受けたためとされる。黙劇化した江戸とその周辺の神楽が相模地方に伝わったといわれる。舞と所作で物語が展開され、従者などの役柄で「もどき」と呼ばれる道化が活躍する。楽器は大拍子、太鼓、締太鼓、笛、鉦が用いられる。



面芝居

面芝居とは明治初期に考案された里神楽師が演じる歌舞伎狂言のパロディで、明治・大正時代には「愛甲の新神楽」として各地で盛んに演じられた。

面をつけてセリフを発することが特徴であり、発声しやすいように面の口辺がやや開いているほか、神代神楽に比べてより人間らしく芝居がかった面相となっている。

現在、神奈川県内で面芝居を継承するのは垣澤社中のみで、神楽のもどき的な面白さを取り入れた三つの演目を、劇場を中心に公演している。



参考文献

江戸里神楽公演学生実行委員会 2016『第九回 楽しくて、わ

神奈川県教育委員会編

かりやすい江戸里神楽公演解説プログラム』

2004『日本の民俗芸能調査報告書集成7 関東地方の民俗芸

永田衡吉 1987『神奈川県民俗芸能誌 増補改訂版』錦正社

能4神奈川』海路書院

福田アジオほか編 1999『日本民俗大辞典』上 吉川弘文館

2006『神奈川県の民俗芸能一神奈川県民俗芸能緊急調査報

告書一』神奈川県教育委員会

講 師 紹 介



第一部 講師



俵木 悟 (ひょうき さとる)

成城大学 文芸学部 文化史学科 准教授。博士(学術)。

1999年 千葉大学 社会文化科学研究科 都市研究専攻 博士課程修了。

専門分野：民俗学。芸能伝承の民俗学的研究、無形文化遺産保護制度の研究。

中国地方各県や鹿児島県、千葉県南房総地域などを主なフィールドとして民俗芸能の伝承についての究を実施。現代社会において伝統的な慣習に規定される芸能を伝承することの困難や、そこから生まれる新たな実践に关心を持っているほか、文化財保護制度を中心に民俗文化と行政の関わりについての提言も行っている。

成城大学ウェブサイトより引用、加筆（写真、本文）

<http://www.seijo.ac.jp/education/falit/anthropology/faculty/satoru-hyoki/>

(2018年3月10日閲覧)



第二部 講師

垣澤 瑞貴 (かきざわ みづき)

相模里神楽垣澤社中三代目家元 堀澤勉氏のご息女、「みづき会」代表。

幼少期より神楽舞台に携わり、相模流里神楽の囃子、舞を父に師事。10歳で大太鼓、11歳で太拍子、12歳で篠笛、14歳で相模の能管(垣澤社中では王管と呼ぶ)、18歳で式三番叟を学ぶ。國學院大学史学科にて日本史を専攻し、その後、江戸流里神楽多加美社中の高見進師匠、日本舞踊玉川流師範の玉川錦之輔師範、江戸型染を主軸に制作活動を行う著名な若手染色家の小倉充子氏に師事し、神楽芸を磨き続けている。

近年は新作神楽や新作面芝居にも積極的に取り組み、彩の国さいたま芸術劇場(埼玉)や横浜能楽堂(神奈川)の公演等、活躍の場を広げている。インバウンド企画など新しい取り組みも多数。晴れの宴席や各種イベントでの獅子舞や神楽舞、和楽器演奏も行っている。

「垣澤社中の民俗誌」(2016江戸里神楽公演学生実行委員会『楽しくて、わかりやすい江戸里神楽公演解説プログラム』)より一部引用

(写真 堀澤瑞貴氏提供 神奈川県立青少年センター公演時に撮影)



田村 明子 (たむら あきこ)

2012年 成城大学文学研究科日本常民文化専攻博士課程単位取得退学、現在は成城大学民俗学研究所研究員。第8回江戸里神楽公演に学生スタッフとして参加。

「女性神楽師の誕生と伝承基盤—埼玉県諸神楽の近現代—」(2015『民俗芸能研究』第58号 民俗芸能学会)、「都市の大社と里神楽—大國魂神社と山本社中一」(2016『信濃』第68巻第1号 信濃史学会)など、江戸流の里神楽を中心に研究を進めている。